ASSETS OF OUR LIVES

≪確かな知識や教養を身につけ・豊かな心を育て・充実した人生を!!≫

2022年7月28日　第36巻14号

2022年前半の新聞記事や雑誌から、いくつかの有益な記事を拾い集めました。原稿は2月14日の分中心ですが、いくつかの最新の記事も載せています。

享保の大飢饉 犠牲者を供養

博多区 川端飢人地蔵尊で夏大祭

川端飢人地蔵尊の夏大祭で享保の大飢饉の犠牲者を供養する関係者

「享保の大飢饉」（1732年）の犠牲者を弔う「川端飢人地蔵尊」（福岡市博多区中洲2丁目）で24日、夏大祭があった。コロナ禍であめ湯の接待や博多川の灯籠流しなどを2年連続で取りやめ、僧侶の読経による施餓鬼供養のみが静かに営まれた。

大飢饉では博多では当時の人口の3分の1に当たる約6千人が亡くなったとされ、犠牲者を悼んで地蔵尊が建てられたという。

地元の上川端商店街の商店主らでつくる上川端町地蔵組合が毎年、夏大祭を実施。今年は約20人が読経に合掌し冥福を祈った。同商店街振興組合の嶋田高幸理事長(80)は「食べられることに感謝し、コロナの早期終息も祈願した」と話した。（真弓一夫）

【左】中洲や川端の町の中にはいくつもの「お地蔵さん」があります。あなたのうちの近くにもあると思います。この地は食事もなく餓死した人や、旅の途中で病気で死んだ行き倒れの人、戦国時代に死んだ武士たちの供養をする場所であることが多いのです。土の中に死体が埋まっていることもあります。無縁仏（むえんぼとけ）＝お墓に埋葬されることなく死んでいった人たちに、そっと手を合わせましょう。

人間の体にある色々な臓器の頑張りについて、心臓や肝臓や肺や胃などの個々の臓器を、一人の「男」として仮想して、臓器の頑張りを訴えた「詩」です。個々の人間は不平を言ったり愚かな行為をしますが、「個々の臓器」は懸命に、一つも不満を述べず、頑張り続けています。作者からのメッセージは、コロナ禍や酷暑の夏の厳しい生活の中であっても、「自分の体の一つ一つの部分を大切にして、日々を過ごしましょう」というものです。

オピニオン　Opinion

黙って黙って働く臓器たち

佐藤　友則＝76

この男の中に心臓という臓器があって、朝から晩まで、晩から朝まで働いている。この男の中には肝臓という臓器もあって、朝から晩まで、晩から朝まで働いている。この男の中には膵臓、脾臓、腎臓、肺の臓という臓器もあって、朝から晩まで、晩から朝まで働いている。

全員で全身を元気にしようとしている。全員で希望を湧かして明るく朗らかにしようとしている。というのに、この男はどうしたことか悪行の限りを尽くしている。全く善行をしていない。しかし、この男が悪行をするために働いているのではない、などとは、どの臓器も言わない。この男の中で言ったりしない。

悪行をしようが善行をしようが関わり合わない。ただ黙っている。無私でいる。無心で働いている。ひたすらこの男をご主人様にして、この一人のご主人様を元気にしようとしている。コロナには負けられない。野原にはススキがなびき、空には羊雲が浮かんでいる。（佐賀県神埼市）

【下】テレビでもよく見かける斎藤文男先生は、森が学生だった５０年前に習った九州大学の法律の先生です。まだ元気みたいですね（笑）。これまでも世界中で何度も述べられている事なのですが「物事を深く議論しないで、少数者の意見は無視しようとする多数決は、本当の民主主義とは言えない」という意見で、最近の自民党による、国会でまともな議論をしようとしないで野党を無視する国会の運営の仕方に対する批判の意見です。故安倍氏に責任があるのです。

多数決は民主主義のルールか？

斎藤文男著

九州大名誉教授でメディアでもおなじみの著者が、重要法案の強行採決が頻発する近年日本の政治状況への問題意識から書き下ろした新刊。多数決と民主主義との関係をルソーなどの啓蒙（けいもう）思想にまでさかのぼって考察するさまは、さながら大学の憲法学の講義を思わせる重厚さ。一方で、政治倫理条例の制定など市民立法運動の重要性も強調されており、観念論にとどまらない実践書としての性格も併せ持つ。多数決万能の風潮に疑問を感じたら、まず手にしたい一冊だ。

（花伝社・1650円）

【下】タリバンがアメリカとの戦争に勝って今のアフガニスタンを支配する様になりました。女性の地位が下がる危機に瀕しています。

9日、国連安全保障理事会の会合にオンラインで参加し、演説するマララ・ユスフザイさん（共同）

「女子教育は平和を築く」

マララさん、アフガン情勢に訴え

【ニューヨーク共同】20オンラインで

12年にイスラム武装勢力「パキスタンのタリバン運動（TTP）」に銃撃され重傷を負ったノーベル平和賞受賞者マララ・ユスフザイさん(24)は9日、イスラム主義組織タリバンが実権を握ったアフガニスタンを巡り、女子教育など女性の権利が尊重されるよう国際社会が「結束して声を上げる」ことが必要だと訴えた。

アフガン情勢に関する国連安全保障理事会の公開会合に

マララさん

平和と安全を

なツール」だ

ンに女性の権利を認めさせる

ことは、アフガンだけでなく「地域の安全保障にとっても重要だ」と指摘した。

会合で演説した国連アフガニスタン支援団（UNAMA）のライオンズ代表は、タリバンによる資金流用を防いだ上で、資金を国内に流入させる手段を検討する必要があるとの認識を示した。

【下】眞子さんをもっと尊重してあげるべきだというＮＥＷＳＷＥＥＫの記事です。森も賛成です。

Commentary

君

主制は、本質的に不公平なものだ。特定の一人が宮殿に暮らし、国民の税金で社交的な生活を送り、大イベントに出席し、著書を出版、映画に参加する。もちろんマイナス面もある。著書をなければならない、大イベント出席しなければならない、大衆の注目にさらされる。王族であることの代償の一つは、私生活がなくなることだ。特定の一人が宮殿に暮らし、国民の税金で社交的な生活を送り、大イベントに出席し、著書を出版、映画に参加する。もちろんマイナス面もある。著書をなければならない、大イベント出席しなければならない、大衆の注目にさらされる。王族であることの代償の一つは、私生活がなくなることだ。

有名な話だが、1936年のイギリス国王エドワード8世は、離婚歴のあるアメリカ人女性ウォリス・シンプソンと結婚するために退位を余儀なくされた。英君主、ひいては英国国教会の最高権威者として、受け入れられない結婚だったためだ。

時代は変わり、2018年にヘンリー王子が離婚歴のあるアメリカ人女性と結婚す

10月にも離婚騒動を出すとも報じられている眞子内親王

ROYAL TRAVAILS

英国人が見たプリンセスの「追放劇」

コリン・ジョイス（本誌コラムニスト）

国家になってしまうことだ。

ることに異論は起きなかった。だが身メーガン・妃が家族になりたいと求められた。英王室は役割を果たすために働き、イギリスに貢献しなければならないことから、時に「ザ・ファーム（会社）」と呼ばれる。王族は労ではなく、特権の分だけ働くべきだ。ヘンリー夫妻がこの役割を果たせない、あるいは果たしたくないと表明するのであれば、王室メンバーが「辞めるか、それとも王室を去るかを選択する必要がある」ことを覚えたようだ。彼らは王室を去ることにしてある種の「追放」のようなものを受けた。王室メンバーの多くは王室から結婚を手助けされている。ヘンリーの結婚は「追放」されるようなものだったようだ。一般のイギリス人からすれば、男子内親王が「平民」と結婚する話は当然に見える。女王はこれを「残念」だとしながらも、彼らの結婚に「反対」するあらゆる国民の元を去って国を出ることを許した。

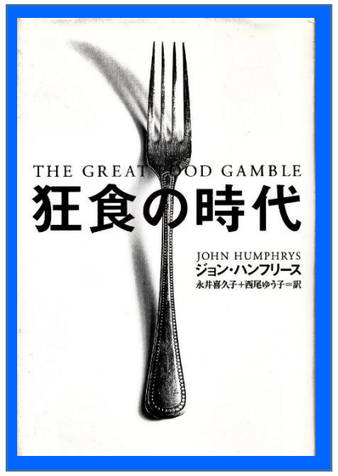
資金調達の手段はいくらでも

実際、多くの点で彼女の「追放」はより徹底したものになる。エリザベス2世はウィンザー公爵、ヘンリーはサセックス公爵、いずれも高貴な称号を維持し、元王族のセンセイとしての地位は女王の強であるとの事実でおかげなのに、彼ら自身に基本的に「反発」するあらゆる国民の元を去って国を出ることという手段だ。

実際、多くの点で彼女の「追放」はより徹底したものになる。エリザベス2世はウィンザー公爵、ヘンリーはサセックス公爵、いずれも高貴な称号を維持し、元王族のセンセイとしての地位は女王の強であるとの事実でおかげなのに、彼ら自身に基本的に「反発」することは、イギリスではいくらでも資金調達の手段はあるのだ。

ヘンリーの場合、英国内の2億ポンドの資金をすでに確保しているとされる。彼らは「王室」から「追放」されるようなものだったとしても、彼らは「王室」から「追放」されるようなものだったとしても、彼らは「王室」から「追放」されるようなものだったとしても、

【下】安倍晋三政権は民主主義国日本を破壊してきました。経済も社会システムも「ほんの一部のお金持ちだけが得をする日本」に変えてしまったのです。テレビや新聞でそのことが知らされないのは、テレビ局も新聞社も自民党と同じお金持ちで、民主主義が破壊されればその分だけ自分たちに有利な社会になり、儲かり独裁政治ができる政権になるからです。国会では野党がいろいろと批判しているのですが、残念ながらそれはテレビでは放送されません。そんな中、「弱い者いじめをし続けた安倍政権」が誕生する前にはテレビにたびたび登場して、自由と民主主義と社会的弱者を大切にしようとした、気骨ある（きこつ＝自分の信念を通す人）ジャーナリストの**内橋克人**さんが亡くなられたという記事です。日本にはこのような立派な人たちもたくさんいることを知ってください。彼の本は今**「もう一つの日本は可能だ」**という題名で、志成館の本立てに置いてあります。彼の本業は「経済学者」です。



学兄　内橋克人を悼む

佐高信

最期まで「公を壊す者」と闘い続けたジャーナリスト

内橋は私にとって、とりわけ経済についての学兄だった。私たちは『PKO』ッポンを射る』などの共著のほかに『城山三郎 命の旅』（講談社）という共編著がある。

そこで内橋は、最初に読んだ城山作品として、鈴木商店焼き討ち事件を描いた『鹿』を挙げ、「城山さんについて語るとき、重要な要素として戦争と国家ふたつはよくいわれるんですが、私はもうひとつ、恐慌、経済恐慌という柱があると思う。だけならずっと昭和恐慌というものにこだわっておられる」と指摘している。『男子の本懐』まで、その問題意識は継続していて、不況の時代にあえて緊縮財政を断行し、軍拡を阻止しようとした浜口雄幸と井上準之助を描いた。

戦争と恐慌がつながっていたという見方は内橋からではのものであり、それは内橋が同じ問題意識でジャーナリスト活動を続けていたことを意味する。

ちょっと手前味噌だが、経済論もしくは企業論の系譜として、城山―内橋、私という流れがあり、それと逆の系譜、長谷川慶太郎―堺屋太一―竹中平蔵という流れがあると私は言ってきた。城山と長谷川は同じ年であり、内橋と堺屋、私と竹中がほぼ同じ年である。

私たちは非正規労働などをなくして個人消費を拡大することが経済の好循環を招くと考えるのに対して、長谷川や竹中までは、といえばかっこいいが、内部留保が475兆円にもなり、会社は富んだけれども、社員すなわち民は貧しいという状況がますますひどくなっている。

内橋はそれを「マクロ経済数値をもてあそべ『人間』を見ず時流に便乗して『市場が淘汰する』なんて、どんな怖い言葉を口にしているのかわかっているのか」と怒っていた。

国鉄の分割・民営化ならぬ会社化に反対して、私たちは当時の国鉄労働組合の応援をした。なぜ輸送を担う国鉄を会社にすることは赤字黒字で測ってはいけないものを新自由主義的にかつ計算に巻き込むことである。現在に至るまでの破壊はここから始まった。

そのころ、内橋と私は民営化させてはならないと国労の委員長たちを激励していたが、彼らの危機感は薄く、反応ははかばかしくなかった。帰途、2人で喫茶店に入って、ガックリだなと言ってみれば内橋は公を壊す者と最期まで闘い続けたジャーナリストだった。

今年の3月に出た拙著『時代を撃つノンフィクション100』（岩波新書）に内橋の『共生の大地』（同）を入れたので送ったら、すぐに礼状が届いた。

「沈みがちな気分をもて余しておりました折でもあり、心から励まされ、いま一度、私も現場復帰を、と心に期したところです」と。私も期待していたのに訃報に接して、内橋のように緻密ではない私も、それに沈み込んでいる。内橋の経済論は文学であり、哲学だった。

（さたか・まこと＝評論家）

◇内橋克人さんは一日、89歳で死去。

東日本大震災と福島第1原発事故が起きた2011年、本紙のインタビューに「自然災害に人災が追い打ちをかけた巨大複合災害だ」と指摘した内橋克人さん

【上】【下】欧米や日本そして中国の経済システムである「資本主義経済」の仕組みは、人間が生きていくために一番大切な「食べ物」の流れの仕組みを知ればよく理解できという本です。志成館に置いています。しかしそもそも人間は生きるための食べ物を求めて闘争を繰り返してきたのであり、その流れを知るということは必然的に「人類史」を知ることになります。このような歴史観を「史的唯物論」ないし「弁証法的唯物論」と呼び、カール・マルクスが「資本論」などで述べている事なのです。大学生になったら資本論、それも第１巻だけでも十分ですから、是非とも読んで、アメリカ合衆国の真の姿、そして中国が目指す社会を知ってください。「なるほどそういうことだったのか」とカール・マルクスの視点のすごさに感心しますよ。（笑）。

食べものから学ぶ世界史

資本主義とはどのようなものなのか。資本主義とともに展開してきた近・現代史は、この世界をどのように変えたのか。この問いに、食べ物の歴史を通して答えたのが本書である。

日本の歴史をみても、明治以降私たちの食生活は大きく変わっていった。それぞれの地域がつくっていた特色のある食文化は後退し、米中心の食生活が広がるようになった。さらにパンやパスタ、肉類や乳製品などを食べる日常が生まれ、外食や総菜の購入などもふえていった。

この変化の奥には、資本主義の発展があったのである。本書は、そのことを世界史のなかで考察していく。

産業革命以降の世界は、なぜパンのような粉食と砂糖の大量摂取をもたらしたのか。資本主義の展開とともに、なぜ世界の食生活は共通化していったのか。なぜ加工品や総菜、大量消費が生まれていったのか。一方で肥満による生活習慣病や大量の廃棄食品が発生し、他方で飢餓に苦しむ人々がふえるという構造は、なぜ生まれているのか。その背後には食べ物の世界を支配していく企業の暗躍があった。

資本主義は自ら商品を生産するだけでなく、それまであったさまざまなものを商品に変えていく。食べ物もそのひとつであり、それまでの食べ物が、農家は作物という商品を生産し、消費者はその商品を購入するかたちに変わった。そして商品の生産と流通が浸透すれば、この過程を支配し、利益を上げようとする企業が暗躍するようになる。気づかないうちに、私たちは資本主義のメカニズムのなかにのみ込まれていく。

もっとも著者が「おわりに」で述べているように、消費者からも農民からも、この資本主義の展開に抗する動きもでている。生活のなかに農的なものを取り入れたり、農民と消費者を新しいかたちでつなごうとする試みは、いまでは世界のいたるところで発生している。資本主義の時代には、資本主義に抵抗する人たちの時代でもあったのである。

評　内山節（哲学者）

（岩波ジュニア新書・902円）

資本主義の支配明らかに

平賀緑著

著者略歴　ひらが・みどり　京都橘大准教授。研究のかたわら市民活動にも参加。著書『植物油の政治経済学』。

【左】お隣の韓国には「犬」を食べる習慣があることは知っています？犬と言っても食用犬なのですが。しかし犬がペットとして家族の一員になる時代が来て（ということは、お隣の韓国では、犬は人間と仲よくはなかったという歴史があることになり、文化の違いに驚かさせられます）もう犬は食べないことにしようとなっているみたいです。

【下】**はやり（＝流行）を追うんじゃないよ!!**

というのが真鍋さんからのあなた達へのメッセージです。今の若い世代は流行を追って、人に遅れまいとしている愚か者ばかりだということです。そのような人たちは、本当に価値がある研究はできないという警告です。

真鍋氏 原動力は好奇心

ノーベル物理学賞

「はやりに走らず」　米で会見

若手研究者にエール

温暖化予測研究 切迫した重要性

NYタイムズ

デザインに方程式

【上】**ノーベル物理学賞を受賞された真鍋さん**の研究の出発点の記事です。将来地球環境が破壊される時代が来るという予言が、真鍋さんが生きている間に生じてしまいました。その結果真鍋さんは幸運にも存命中に受賞されたのです。遠い将来起こるであろうと考えておられたことが、すでに起こってしまったという地球にとっては悲劇的なことなのです。さらに残念なことは、彼みたいな優秀な科学者の大半が「日本に戻って研究するつもりはない」と明言されているという事です。菅総理そして岸田総理と続く「日本学術会議の任命拒否問題」に代表されるように、この国の指導者、政治家、企業家の多くが「お金儲けにならない科学の価値」を認めようとしないのです。アメリカと同じになってしまったのです。日本沈没を森が憂えるのがわかって頂けると思います。

【下】いじめ、ブラック校則、部活問題についての記事は、今後もＡＳＳＥＴＳに載せ続けます。早い話が、学校を運営している文部科学省や地方の教育委員会などがまともな仕事をしていないということです。

大津中2自殺10年

学校 いじめ軽視なお

防止法改正 父訴え

愛犬家急増 国民がタブー視

韓国「犬食文化」消える？

文大統領が禁止法制化を示唆

無責任生む教委制度